飛鳥時代と天平時代の仏像の特色

34期生

Ⅰ　テーマ設定の理由

第一に僕は歴史に関する物（特に古代）が好きで、中でも仏像に興味を持っているから。第二に仏像は現在残る文化財の中で、最も歴史を示す物と思うし、その事からその時代の事件と組み合わせ、時代別の仏像の変化を詳しく知りたいと思ったから。

他に、仏教に対する日本人の見方も仏像に反映してると思うので、その事も調べようと思う。

Ⅱ　研究方法

(1)　仏像を見て、その第一印象をつかむ。次に全体的、部分的に観察する。

(2)　本の解説と自分の考えを比べる。

だいたいの感じをぱっとつかめるようになるまでこの作業を続ける。

(3)　幾つかの仏像の古い新しいを予想し、本の解説とどう違うかを知る。

(4)　仏像の時代の流れをつかみ、できるだけ歴史的背景も考える。

Ⅲ　研究結果

(1)と(2)の具体的な観察より出た結果は(3)と(4)〔主に(4)〕である。

時代別に仏像の特色などを述べるとこうなる。

〔1〕飛鳥時代の仏像の特色

この時代、日本に仏教が伝わってきた。鳥仏師（止利仏師）らも、日本にやって来て、仏像を多く残した。前期の仏像(推古天皇の頃)と後期の仏像(舒明～皇極天皇の頃)とに分けられる。

(1)前期の仏像の特色

目は杏仁形、口は仰月形（右図）が多く、左右対称や平面的な感じが強く、図案化されている。かたい作風である。

人間的な像は非常に少なく、大きい仏像などは見る人を圧倒させるような威厳さえある。他の時代の像には無い特色である。

◦主な作品　①飛鳥寺安居院（法興寺）、釈迦如来坐像（銅像）275.7㎝

一般に飛鳥大仏と呼ばれる、日本最古の現存仏。６０６年（推古十四年）完成されたという。当初の部分は残念なことに、顔の一部と左耳、右手の中央三指のみで、他は後補であるが、大体の面影はあるといわれる。非常に威圧感があり、さも「異国の神」といった感じである。仏のやさしさなどは伝わって来ず、単に仏を紹介するにすぎない像であったろう。しかし、この像を天皇や蘇我馬子が見てる事は確かだ。この人々はこの像をどう思っただろうか？

②法隆寺金堂、釈迦三尊像（銅像）86.3㎝

飛鳥の仏像には銅が多いが、本像もそのひとつ。聖徳太子の往生を願って造立されたというが、作風で造立年代にずれがあるという。形は一つの光背に三像がある。

中央に釈迦、両脇に菩薩（各菩薩にも光背がある）であり、釈迦は神秘的ではあるが紳士的でもある。その顔はおも長で、台座に垂れている衣は図案化されている。手には水かきがあり、人々を残らずすくい取ろうとする仏の慈悲が説明されている。

脇の菩薩は同寺夢殿の神秘的な救世観音立像に似ているが、笑い顔が可愛いい。

この頃の像の微笑は「アルカイック＝スマイル」といわれ、本像にもそれがある。

今述べた二つの像以外にも優れた作品はいくらでもある。が、それらは皆、神秘的で、この時代に多い小銅仏はたいていが説明的で、やさしさは少ない。が、写実的でない所に仏の尊さが出てるのかもしれない。鎌倉時代になると、仏像は写実的になり、美術的には最高である。しかし、余りに仏が人間じみてきたことによって、最後には人形のようになってしまう。飛鳥の頃の仏師はそれを恐れ、仏を神格化したものと思う。

(2)後期の仏像の特色

人間味を増し、おだやかな顔になるが、まだ写実性は薄い。側面感が強くなっている。

かたい像は減ってきているが、「アルカイック＝スマイル」は幾分残っている。

◦主な作品

①中宮寺、弥勒菩薩半跏像（木像）167.6㎝

半跏とは考えている像に多い、いわば足組みである。この像はかつての50円切手の図案で、よく京都広隆寺の弥勒と比べられる。右手を頬に触れ、考えている像(思惟像)である。人間に近く、ある作家は「清純な乙女」とも言っている。まだ足の部分などは大きくへん平で、飛鳥様式を受けている。（足の大きいわけは、寺の言うには菩薩の、原野を歩く修行の結果だという。それが本当とすると、この像も説明的である。大体、右手を頬に触れ、考えているかっこう自体が説明的である。このような思惟像や、足の大きい像は後世には無い。説明の必要がなくなったのだろうか。）

他に、スマートで背の高く、横から見ればくの字形の、法隆寺百済観音像や、垂れている帯の面が横を向いてる、同じ寺の日本最古の四天王立像などがある。これらの像は、側面から見ても美しく作られており、今までにない事である。目を杏仁形でなくし、口びるも一文字な像も試みられた。　例　法輪寺　薬師如来坐像　虚空蔵菩薩立像

〔2〕白鳳時代の仏像の特色

この時代は飛鳥時代と天平時代の間の約三十年間であり、天智、天武両天皇の頃である。作風は頭が大きく、子供のように可愛く、若々しい像、(例えば「山田寺仏頭」)や、頭、体、足の三体が直接つながってる（ブロック式）像がある。

ブロック式の像は、首がなく、坐像などでは体が足にめりこんでおり、堂々とした仏を表現したもののようだ。　例　当麻寺金堂弥勒如来坐像

体をひねったり天衣（仏のまとう帯のような物）が水の流れのようになめらかな像などが出てきた。これは自由な表現を試みたものだろう。

この自由さが後の天平時代に引き継がれる。白鳳時代の像には若々しいものも多いが、これは新時代へ希望を持つ日本人そのままの姿ではないだろうか。

◦主な作品

① 深大寺、釈迦如来※倚像（銅像） 82.7㎝

銅のつやのある特性を生かした、自由な作品で、この傾向も新しい。鼻と眉が続いており、鼻と口の間の線（飛鳥に多い）は、古い傾向である。童子のように、ほほえむ表情は可愛いい。これと似た作品に、法隆寺夢違観音、阿弥陀三尊、新薬師寺香薬師仏（この像は盗まれて今はない）などがある。これらは皆、顔が丸く、童子に似て、首すじの線（三道）は、右図のように自然である。首の線は彫ってあり、不自然だが全体に童子に近く、自然な像に、鶴林寺観音菩薩立像がある。※倚像→椅子に座った像。

↑飛鳥時代　　↑白鳳以後

② 石位寺、石仏三尊像 115.4㎝

日本最古の石仏。足の甲は上から見下げたように彫られ、その傾向は同時代の長谷寺銅板仏にも共通する。生々しい石仏。

〔3〕天平時代の仏像の特色

710年平城へ都が移動し、ここで急に大規模な造寺造仏活動が行なわれた。遣唐使が再開され、唐の文化、学問が日本に入り、その影響を大きくうけた。仏像もその一つである。日本人は唐の文化を吸収し、それを日本化する事に努めた。また当時の仏教は、今で言えばナウな物の代表であった。

天平時代は前期（720年頃）、盛期（746年頃）、後期（759年頃）の三つに分けられる。

(1)前期の仏像の特色

この頃は天武天皇の建立した薬師寺の薬師三尊像に代表される。この像はかつての東大寺大仏を小さくしたものとも言われ、その銅の光の美しさは「光の泉」とまで賞賛された。人間に近く写実的な像が多いが、仏の崇高さ、その精神を内に秘めており その美しさは盛期を頂点とする、唐の則天武后朝時代の影響が強いという。

◦主な作品

① 薬師寺、薬師三尊像（銅像） 中尊 254.7㎝ 脇侍 平均約 316㎝

中尊の薬師如来は仏の偉大さ、慈悲、高さなどをすべて持っているように思う。福々しく、仏の理想像である。両脇の日光、月光菩薩は、体を中尊の方へひねっており、足も片方をわずかに前へふみ出した「遊び足」である。これはどこへでもすぐ飛んで行く菩薩の性格を表していると思う。中尊の如来の足の裏にも瑞祥文（ずいしょうもん一仏の足の裏にあるとされる模様）が刻まれており、説明的要素も意外に多い。同じ寺の銅像、聖観音立像は、直立の姿勢をとり、若々しい青年の理想像である。衣や装飾も非常に細かく、菩薩の偉大さをも現しているようである。薬師寺の仏像は銅像が多く恐らく同じ工房によるものであろう。

天平にもなると、仏や菩薩以外に中国から「天」が多く入って来た。この天は主に仏法を守護するもので、性の区別があった。四天王や帝釈天、吉祥天、弁才天、技芸天などがそうであり、一つの受け持ちがあった。有名な仁王さんも天の一部である。

興福寺に残る「天竜八部衆」も天であり、その中でも「阿修羅像」は有名である。

阿修羅は本来戦争好きの神なのだが、それがよく理解されなかったらしく、その顔は少年でやや眉をしかめている。目は少し切れ長で、人間そのままの顔である。

内に何かを秘めているようだ。脱活乾漆造（うるしと布とを交互にはり合わせた、いわゆるはりこ）であり、この材料は興福寺の像に多い。十大弟子像もその一つである。

(2)盛期の仏像の特色

聖武帝が大仏を造立させたのは国中が乱れていたからであろう。しかしそれはかえって国を乱れさせる事になった。藤原の血の流れている自分が天皇となった事の後めたさを打ち消すために仏教奉仕に力を入れたのかもしれない。その結果、多くの美しい仏像が作られた。これらの像は個人の作品としてではなく、一つのグループ（例えば造東大寺司）の作品として残った。そのため仏師の名は明らかでない。それにしてもこれだけの優れた仏を造り出すとはすごい。さすが盛期というだけあると思う。

◦主な作品 ── 盛期の代表作はほとんど東大寺にある ──

① 東大寺法華堂(三月堂)の乾漆仏

法華堂はかつて良弁の修業してた堂である。その本尊、不空羂索観音立像は、密教的な顔をし、八本の腕が一つの空間を作っている。そのためか、下半身が小さく見える。そのため下半身には天衣を交差させているが、それでも小さく思える。その両脇侍だったと思われる、梵天、帝釈天像は細部にとらわれず、表情もゆったりしているが守護神としての厳しさもある。四天王や仁王の像はやや固く、ゆったりした感じすら受ける。お高くとまってるという気もする。この両像について、二つの本はそれぞれ違う説を述べていた。一方は「これらの像はそのややぼんやりした中に気字の大きいところをたたえてる造型は天平後期の作風である」とし、「東大寺の大仏」小林剛 もう一方は「その古典的な造型は752年の東大寺誕生仏などより古い作」としてる。

「日本の美術」西川新次 僕は、その形態の未完成な事や、後期の仏のぼんやりさとは違う表情の強い所がある事などから後者に近い考えである。

② 東大寺戒壇院の四天王と法華堂の塑像

次の仏像群は皆、土で造った塑像で、やり直しのきくこれは乾漆と共に天平に多い。近い作風なのが戒壇院四天王と法華堂日光、月光菩薩で、この人間的な表情をした像は、一番進んだ作風であり、その中に高い精神性をも秘めている。法華堂の執金剛神立像は、口と目をかっと開き、腕には血管が浮き出ている。これらの写実的表現は、「バロック式」といい、外見のみを重視するのが四天王像と逆である。この作風は、新薬師寺の伐折羅大将像にもあり、形態はかたく、髪も怒りでさか立ってはいるが形式化されている。亀井勝一郎は本像を「もはや信仰が病的になってきた象徴である」として、きらっているが、このような外面のみの説明的な「古典的表現」も単純明快でいいと思う。

他に自由な像も多く、東大寺の誕生釈迦立像や、大仏殿前燈籠浮彫の音声菩薩の子供のような像がそれである。最も美しかったと思われるものが東大寺本尊の盧舎那仏坐像（大仏）である。しかし、その雄姿は今は無い。（現在の大仏は頭が江戸、胴が鎌倉で、当初のものは足と蓮華座しかない。）非常に惜しい。

盛期の特色は古典的作風を守りながらも、内面が精神的なものを造り出した事である。

(3)後期の仏像の特色

「咲く花の薫うが如く今盛りなり」とまで言われた平城京も、やがてその花の枯れてゆくようにすたれてきた。道鏡は称徳女帝と手を繋ぎ、まず藤原仲麻呂を殺し、淳仁

帝を追い出した。その頃中国風の西大寺を女帝は建てた。建物に力を入れたせいか、人民が寺造りに疲れたせいか、仏像の造立は進まなかった。気のせいか仏像もぼんやりと疲れたような顔が多い。これらは有大さを重視した大陸的なものというが、天皇の政治に疲れ果てた人々の顔のような感じがする。一方、鑑真が来日し、759年に建てた唐招提寺の諸仏にはぼんやりした顔の像もあるが（金堂の大きな三体の乾漆仏）、有名なのは木彫の破損仏で、堂々とした量感を持ち、密教的で次の延暦・弘仁時代(平安前期）の幕開けを思わせる。このやり直しのきかぬ材質を選んだ仏師の厳しい気持ちがそのままこれらの厳しそうな像に反映したのだろうか。もちろん、唐の影響がそこにはあり、玄宗朝時代の影響という。平安様式の※翻波式衣文も薄くある。

※　翻波式衣文　平安前期に多く衣のひだが大小順番に波打っている事をいう。

◦主な作品　①有大な気宇を秘めた像

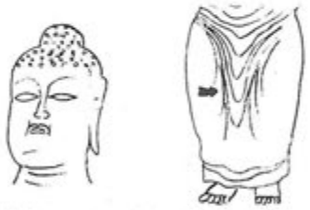
例えば聖林寺十一面観音像などは表情や体に生気がなく、衣の肉付けも観念的である。しかし和辻哲郎は「偉大である」とし、本像を賞賛してる。確かにこの全体に有大ながらも衣などが張りつめた像には偉大さがあるかもしれない。

唐招提寺の実際に千の手がある千手観音（実際に千手あるのは日本にこれと葛井寺のものしかなく、どちらも後期の制作）は、顔もおだやかであるが、このわざわざ千の手をつける所など、仏造りの限界が来て凝る事しか残りの道は無いようなものを見せつけられる。同じ頃、ぜいたくの全てにあきた称徳女帝が、中国作りの凝った建築の西大寺を建てた事と似ているような思いがする。他の作品も皆、ぼんやりしている。

②密教的で威圧感のある像

新風をふかせたのが唐招提寺の木彫仏で、すもう取りのような豊満な体に厳しい顔をした密教的なものである。これらは中国の影響というから、すでに向こうでは密教の考えが広まってたのかもしれない。表現の例をあげると、顔は下ぶくれで、大体が足の間に衣の線を集めている。（右図）また、怒った顔をした大安寺のこれも木の菩薩像がある。これもその影響のうちだろうか？

この頃には脱活乾漆から、木を心としたはりこの木心乾漆が多くなる。また、木彫も復活し、後に全盛期を迎える。　薬師仏立像より→



永井路子は後の平安前期の像が最も好きという。また鎌倉期の像が美術的に頂点という人もいる。しかし写真家の入江泰吉氏の言うように、天平期の仏像がその内面の精神的高さ、尊さ（仏らしさ）において最も頂点であるとは考えられないだろうか。

Ⅳ　結　　論

大ざっぱに言って、飛鳥時代の像は人間味が薄く神秘的である。その訳は仏の意味がよくのみこめず異国の神としての恐しさが仏師にあったか、わざと仏を神格化して人間と区別したもののいずれかと思う。どちらにしてもこの時代の仏像は近寄りがたい。それがだんだんと表現が自由になっが来て、人間らしくなる。初めに側面感が強調されてくる。やがて衣によるやわらかさの表現や、体のくねりなども出てきて白鳳時代を通り、天平時代に入る。内面の表現も行なわれ、精神的な像が多くつくられるが、後期になるとぼんやりとした像が多く作られる一方、密教的な新しいタイプの像が日本へ入り、密教の伝来と

共に平安に入るとこの作風が大流行する。このように日本の古代の仏像は著しく唐や隋の影響を受けている。また、この頃には石仏が少ない。

これらを表にすると下のようになる。

	飛鳥時代		白鳳時代	天平時代		
	前期	後期		前期	盛期	後期
大まかな形						
特長	杏仁形など 左右相称 平面的で硬い	立体感出る やや自由な 格好になる	ブロック的な像 子供らしい像 立体感が自由に	人間の内面に 着眼した ポーズは自由	日本化 精神的な面 の頂点	ねむそうな 大陸的な像 密教的な像
事件	聖徳太子摂政 推古女帝即位	山背王殺害 入鹿の勢力	大化改新 壬申の乱	聖武帝即位 長屋王の変	大仏開眼 国分寺造立	道鏡進出 鑑真渡日
代表作	法隆寺金堂 釈迦三尊像	法隆寺 百済観音像	旧山田寺 仏頭	薬師寺金堂 薬師三尊像	東大寺法華堂 不空羂索観音	唐招提寺 薬師仏像
流れ	かたい	やわらかく	子供らしい ブロック的に 堂々と	堂々と 人間らしく やわらかく	子供らしい 威厳さえ 出てくる	新羅小仏 ぼおっとした 中の大らかさ 肉体の肥満に よる威圧感

Ⅴ　総　　括

これらの時代の像は皆、奈良に集まっている。飛鳥時代は法隆寺、天平時代は東大寺と唐招提寺という風にたいていの作品は幾つかの寺へ行けばあったが、現地へ行っての観察も案外難しかった。一度では足らず幾度も足を運んだ事もあった。

本も多く読んだが結局自分の考えとよく似ていた。しかしそれらの本の中で仏像がその頃の事件と密接に結びついている事と、飛鳥、天平時代が決して皆の言うように花の薫うが如く良い時代では無い事がわかった。仏像の裏にはどす黒い流血の事件が必ずあった。内乱、伝染病、盗賊……考えてみれば仏像が造られるという事はそれだけ人間が世の中に不安を持っていたという証明だろう。また、寺々の裏を流れる権力戦争のうずが幾つもある事をも知ったが、仏像や寺好きにとってその「光」に対する「影」はぜひ知るべきであろう。

（主な参考文献）

日本の美術、法隆寺（水野清一）、東大寺の大仏（小林剛）平凡社
日本の美術　彫刻　飛鳥・奈良時代（作者不明）　第一法規出版社
日本の仏像（町田甲一）講談社／日本仏像100選（町田甲一・入江泰吉）秋田書店